

現在の歯科医師国家試験における大学教育の関係性

岡田優一郎

キーワード：歯科医師国家試験、卒前教育



(おかだ・ゆういちろう)
ICDフェロー
日本大学松戸歯学部
組織学講座

I. 緒言

歯科医師国家試験が近年難関化している。その背景としては出題基準の拡充や合格基準の上昇があげられる。

また、歯科医師国家試験の難関化、CBT (Computer Based Tasting) の導入に合わせ大学の進級・卒業基準が引きあがり、低学年からの留年が増加している。試験に対応できるカリキュラムの構築、学生に対しての課題や補習などのフォローもより重要となっている。

II. 歯科医師国家試験の現状

現在、歯科医師国家試験は難関化している。その要因には下記が挙げられる^{1), 2)}。

- 医科知識、摂食嚥下領域、法歯学分野など出題範囲の拡充
- 臨床実地問題の増加と問題のタキソノミーの上昇
- 出題形式、合格基準の上昇

20年前に実施された第92回歯科医師国家試験(1999年3月実施)の合格率は83.6%であったが、最新の歯科医師国家試験である112回歯科医師国家試験においては合格率が63.7%(3,232人受験、2,059人合格)と20年間で合格者数にして約500人の減少となり、現在では合格者数が2,000人を割り込むことも珍しくない³⁾。

図1～3に最新10年間(103回～112回歯科医師国家試験)の合格率と合格者数の推移(全体・新卒・既卒)を示す^{3), 4)}。

III. 歯科医師国家試験までの関門～CBT、OSCE、卒業試験～

歯科医師国家試験受験までに合格すべき試験として、大学別に行う定期試験・進級試験の他にCBT、OSCEがある。

共用試験であるCBTは、歯科医師国家試験と同一の試験範囲で受験する初めての試験ともなる。

再試験の人数は年々増加しており、第1回目が105名であったのに対し、最新の第12回では599名と年々増加している。これには学生の学力低下に加え、大学



図1 歯科医師国家試験合格者数・合格率の推移（全体）

Fig. 1 Changes in the number of successful applicants/pass rate for the National Board Dental Exam (overall)

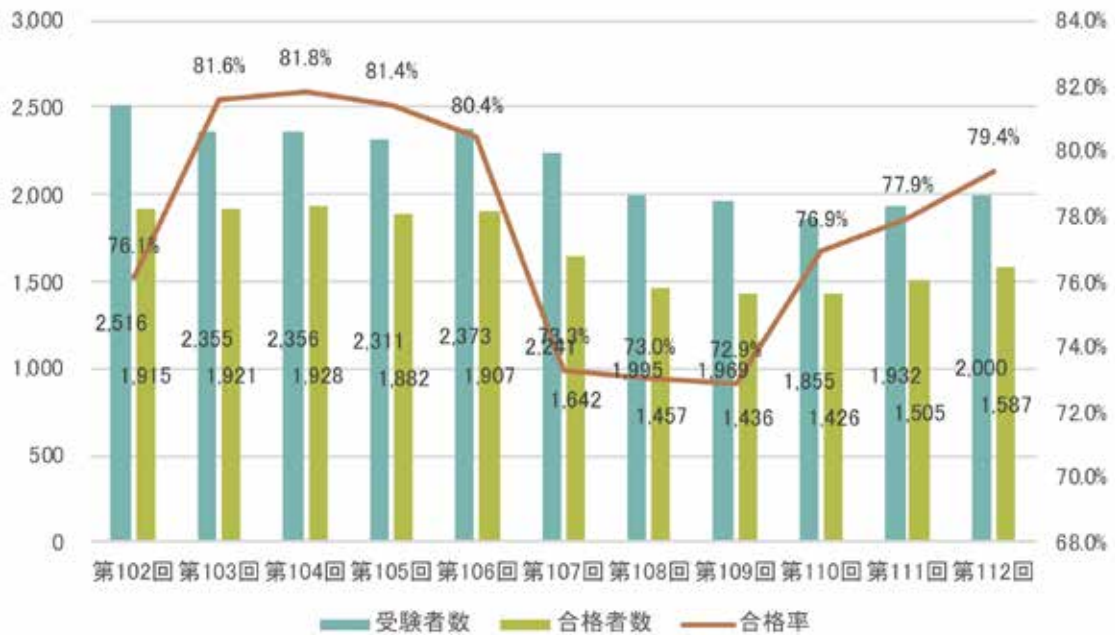


図2 歯科医師国家試験合格者数・合格率の推移（現役）

Fig. 2 Changes in the number of successful applicants/pass rate for the National Board Dental Exam (directly on graduation)



図3 歯科医師国家試験合格者数・合格率の推移（既卒）

Fig. 3 Changes in the number of successful applicants/pass rate for the National Board Dental Exam (previous graduates)

側の基準引き上げも関係している^{4~6)}。

CBTや歯科医師国家試験と別に大学別の客観試験を課している大学も数多い。特に卒業試験では試験範囲の広さもさることながら、各大学に特徴的な内容もあわせて出題される。

特徴的な内容は歯科医師国家試験への出題の有無を問わず出題される傾向にあり、歯科医師国家試験の過去問題を完全に解答できても卒業試験を合格できないケースは多々存在する。

歯科医師国家試験の難易度の上昇や進級・卒業基準の厳格化を受け、歯学部では低学年からの留年も増加している。

最新の調査結果である第111回歯科医師国家試験に対する最低修業年限での歯科医師国家試験合格率は全体で50.6%であった。第103回歯科医師国家試験における最低修業年限での歯科医師国家試験合格率が64.4%であることを考えると、歯学部での留年が増加してい

ることがうかがい知れるであろう。

また、一度留年した学生は複数回にわたり留年しやすく、最低修業年限を2年以上超過する学生も珍しくない。

平成20年度では最低修業年限を1年以上超過した学生は832人であったのに対し、最新のデータである平成30年度では1,119人と大幅な増加がみられた。

特に、2年以上超過している学生はここ10年で1.5倍近く増加している。

学年ごとで見ると、学年が上がるほど留年率も高くなる。この背景には、先述したCBT・卒業試験における試験範囲の広がりやそれに対応しきれなかったことがあると推測される。

歯科医師の教育課程における最低修業年限超過学生数、歯学部における各学年での留年・休学者の割合、最低修業年限での歯科医師国家試験合格率の推移を以下（表1, 2, 図4）に示す^{7~11)}。

表1 歯科医師教育課程裁定修業年限超過学生数（文部科学省学校統計調査より）

Table 1 Number of students exceeding the minimum years required for graduation in dental education (based on Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, School Statistics Survey)

年度	合計	1年超過	2年超過	3年超過	4年以上超過
平成26年度	1,220	616	301	180	123
平成27年度	1,316	681	312	165	158
平成28年度	1,256	560	381	165	150
平成29年度	1,134	537	266	189	142
平成30年度	1,119	553	247	138	181

表2 歯学部における留年・休学者の割合

Table 2 Percentage of students who repeated the same course or took leave of absence in the Department of Dentistry

年次	平成30年度	平成26年度
1年次	7.5%	8%
2年次	16.4%	17%
3年次	19.0%	17%
4年次	21.8%	23%
5年次	23.1%	26%
6年次	32.7%	36%
全体	20.2%	21%

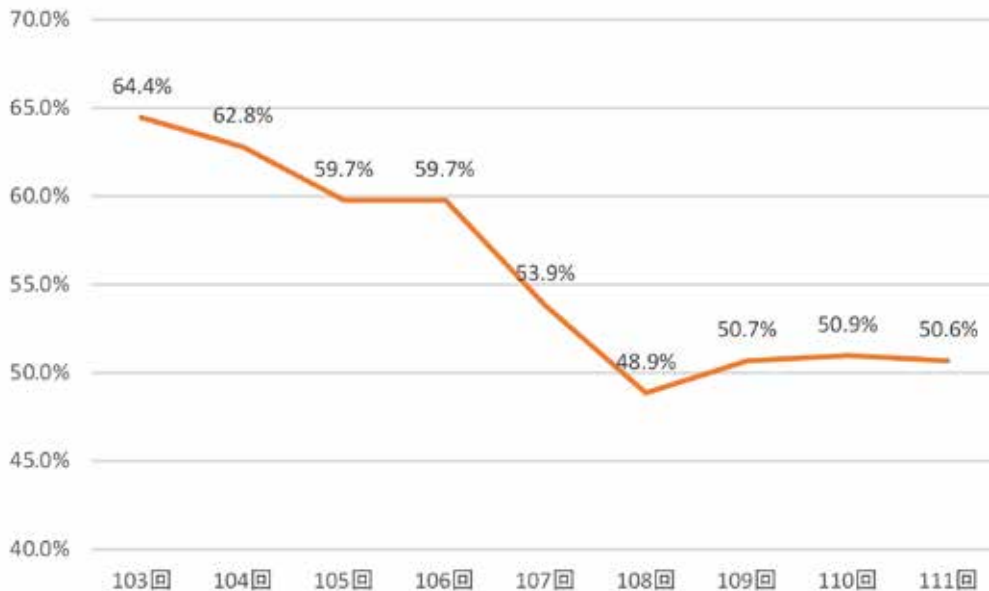


図4 最低修業年限での歯科医師国家試験合格率

Fig. 4 Pass rate of the National Board Dental Exam with the minimum years required for graduation

IV. 大学側の対応・学生の対応

難関化する歯科医師国家試験に対し、大学側もカリキュラムの改革に力を入れている。直近のカリキュラム改革では、2016年と2018年以降に実施した大学が多くを占める¹²⁾。

これは平成28年度版のモデル・コア・カリキュラムの改訂をにらんでのことと推察される。

推薦入試・AO入試などの入試制度の多様化に伴い、ほとんどの大学でリメディアル教育（大学教育を受ける前提となる基礎的な知識などについての補習教育）を数学、英語、理科（物理、化学、生物）を中心に実施している。

また、カリキュラムの改革の基本方針に初年度教育を掲げている大学も存在するなど、低学年からの教育に力を入れつつある。

丸暗記・一夜漬けでは目先の試験を乗り切ることができても、学年が上がるとほころびが出てくることを自覚する必要がある。

低学年のうちからCBTや歯科医師国家試験を見据えた学習習慣の確立は必須であると考えられるが、学習習慣の確立という点を考慮すると、基礎系・臨床系の教員だけでなく教養系の教員の果たすべき役割はかなり大きいものであろう。

V. 結 語

難関化する歯科医師国家試験、歯学部に進級に合わせ、大学・学生双方の取り組みが必須である。

カリキュラムの構築や入学の基準の厳格化のみならず、基礎的学力が不足していると判断された学生に対しての課題や補習などのフォローもより重要となる。

学生が歯科医師に対する強い憧れと高いモチベーションを持ちながら学習できるよう、大学・学生に加えて高校までの教育や国なども巻き込んだ対策が必要となるのではないだろうか。

参 考 文 献

- 1) 厚生労働省：歯科医師国家試験出題基準，平成30年版。
- 2) 厚生労働省：歯科医師国家試験出題基準，平成26年版。
- 3) 厚生労働省：第112回歯科医師国家試験合格発表について。
- 4) 厚生労働省：第111回歯科医師国家試験合格発表について。
- 5) 日本歯科医学教育学会：歯科医学教育白書2017年版，64-66。
- 6) 日本歯科医学教育学会：歯科医学教育白書2011年版，64-66。
- 7) 文部科学省：平成30年度学校統計調査。
- 8) 文部科学省：平成29年度学校統計調査。
- 9) 文部科学省：平成28年度学校統計調査。
- 10) 文部科学省：平成27年度学校統計調査。
- 11) 文部科学省：平成26年度学校統計調査。
- 12) 日本歯科医学教育学会：歯科医学教育白書2017年版，27-30。

●抄録● 現在の歯科医師国家試験における大学教育の関係性

／岡田優一郎

歯科医師国家試験が近年難関化している。その背景としては出題基準の拡充や合格基準の上昇があげられる。

また、歯科医師国家試験の難関化、CBT (Computer Based Tasting) の導入に合わせて大学の進級・卒業基準が引きあがり、低学年からの留年が増加している。

試験に対応できるカリキュラムの構築、学生に対しての課題や補習などのフォローもより重要となっている。

キーワード：歯科医師国家試験、卒前教育

Influence of College Education on current National Board Dental Exam

Yuichiro OKADA Department of Histology, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

The National Board Dental Exam has become more difficult in recent years.

The background reason for this would be the expansion of the material covered by the exam, and more stringent acceptance criteria.

In addition, since the exam became more difficult and CBT (Computer-Based Testing) has been introduced, graduation and grade promotion standards have become stricter, and an increasing number of students even in the lower grade remain in the same course for another year.

It has also become more important to build a curriculum that can be applied to exams, and to follow up on student assignments and supplementary lessons.

Key words : National Dental Examination、 Undergraduate Education